関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

グリム・メルヒェンの中の「魔女」 : もう一つの「魔女」狩り

その他のタイトル	?Hexen“ im Grimms Marchen : eine andere ?Hexenjagd“
著者	鬼束 佳代
雑誌名	独逸文学
巻	49
ページ	221-243
発行年	2005-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018059

関西大学『独逸文学』第49号 2005年3月

グリム・メルヒェンの中の「魔女」
── もう一つの「魔女」狩り ──

鬼 束 佳 代

0．序

「魔女」ときいて、人はどんなイメージを思い浮かべるでしょうか。フードのついた黒いマントをまとった、いかにも意地悪そうな顔つきをした鼻の長い老婆でしょうか。それとも「魔女の宅急便」に出てきたような、町の人たちと仲良く暮らし、人間語を話す黒猫を連れた可愛らしい少女でしょうか。

でも、たとえ「魔女」がどんな姿で描かれていようと、彼女が「非」人間的存在であることに変わりはありません。

かつて多くの女性たちが、辛酸を極めた魔女狩りの歴史の中で、この「魔女」の汚名を着せられ、告発され、拷問の末に処刑されました。

ところが私たちは歴史が作り上げた「魔女」が、どこにも存在していないことを知っています。彼女たちの特徴とされた、箒や飛び薬を利用して空を駆け巡った、サバトで悪魔や仲間たちとの乱痴気騒ぎに興じたという痕跡など、この世のどこを捜してもありはしないことも知っています。

それにもかかわらず「魔女」という言葉は死語になる気配もないし、今でも絵本や物語といった空想の世界に登場するだけではありません。この世に存在していないものに対する呼称が、現実にいる誰かに使われることもあるのです。例えば日本にはヨーロッパの意味するところの「魔女」に相当する存在はありません。その概念もイメージも、外国から入ってきたものです。ところがその日本においてですら、1964年の東京オリンピックでは、女子バレーボールチームが「東洋の『魔女』」と呼ばれています。

ところでこの「魔女」ですが、この人たちは一体どういう人たちだったのでしょうか。彼女たちはある日突然生まれたのではありません。実

図1：箒にまたがって空をとぶ「魔女」たち。

は「魔女」という名が与えられる以前から、彼女たちは世界中のどの社会にも存在していました。といっても元々は、今私たちが抱いているような「非キリスト教的な存在」では決してありませんでした。ある時キリスト教の世界でだけ、「魔女」は迫害の対象となったのです[1]。

今も尚、世界中の人々に読まれ続けている『グリム童話』からもその

1 Vgl. Condert, P. Allison: The myth of the improved status of protestant women: The case of witchcraze. In: Witchcraft, women and society. Carland publisching Inc, 1992, S. 85ff.

ことが見て取れます。そこで今日はこの『グリム童話』を用いて、「魔女」とはどんな存在だったのか、ということを探ってみたいと思います。

なぜ『グリム童話』なのかというと、それはこの童話集は表題こそ「子供と家庭のための」と銘打っていますが、それは幼い子供たちのみを対象とした、単なる創造メルヒェン集ではないからです。『グリム童話』は、ゲルマン民族が築いてきた文化の大切な「遺産」の結集です。そのため、この中での行為は実際にあった「文化」そのものであり、登場する人物達は皆「文化の再現者」です。ということは、ここに登場する「魔女」たちを見れば、歴史上の「魔女」についても探ることができる、ということになります。

といっても200話もの物語全てに「魔女」が出てくるわけではないので、今日はおそらく一般に馴染み深いだろうと思われる、『兄と妹』『ヘンゼルとグレーテル』『白雪姫』の三つの作品を採りあげて、「魔女」について言及していきたいと思います。

尚それぞれについているKHM番号は、全て決定版（第七版）のものであることにご留意ください。

1．「魔女」と名指しされた女性達

ここで本論にうつる前に、各作品のあらすじを簡単に付け加えておきます。下線部の部分は、「魔女」と名指しされた人とその行動、そして結末です。

①『兄と妹』（KHM11: Brüderchen und Schwesterchen[2]）

・登場人物…継母。兄と妹。王とその家来。乳母、そして継母の実の娘。

・あらすじ…継母に疎まれた兄妹が家出をし、森を彷徨います。喉が渇いた兄は、二度は妹の「飲むと動物に変身してしまう」という忠告を受け入れますが、とうとう我慢できずに継母が魔法をかけた泉の森を飲んでしまい、鹿になってしまいます。妹は鹿になった兄と一緒に森で暮ら

2 Vgl. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand, Bd. 1. Philipp Reclam Jun, 1999, S. 79ff.

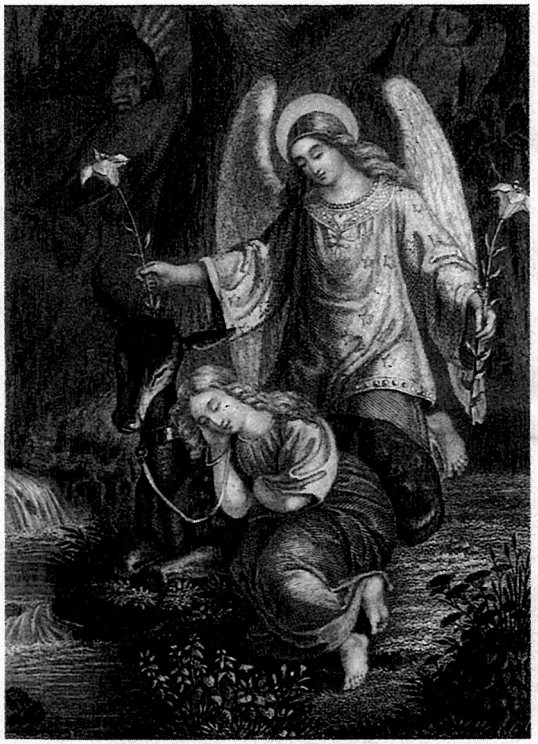

図２：グリム兄弟の弟、エーミールが描いた『兄と妹』の挿絵。
鹿になった兄と妹を見守る天使。しかし左奥には、おそろしい「魔女」の姿も描かれています。この「魔女」はいわずもがな、二人の継母です。

しますが、ある時王様に見初められ、兄を連れて結婚。やがて男児を出産するものの、継母が現れて彼女を殺し、代わりに継母は自分の実の娘を妃にしてしまいます。殺されてしまった王妃である妹は、兄である鹿の世話と、我が子への授乳のために毎夜城に現れます。乳母からそのことをきかされた王様は、ある夜亡き王妃に会い、事の顛末を知ります。王妃は生き返り、継母とその娘は殺されてしまいます。そして鹿になった兄は再び人間の姿に戻り、みんなで仲良く幸せに暮らしました。

②『ヘンゼルとグレーテル』(KHM15: Hänsel und Gretel[3])
・登場人物…きこりの夫婦、兄ヘンゼルと妹グレーテル。
・あらすじ…ひどい飢饉のために食べる物がなくなった一家。継母の勧めで、口減らしのために自分達が翌朝森に捨てられることを知ったヘンゼルとグレーテル。メソメソ泣くだけの妹と異なり、兄は外で小石を拾い集め、それを目印に二人は無事に家に帰ります。しかしまた二人は森に捨てられることになりました。今度もメソメソ泣くだけのグレーテルを、ヘンゼルは優しく慰めます。しかし小石が手に入らなかったため、パンを道標に使いますが、小鳥達たちに食べられてしまい、二人は帰る道が分からなくなってしまいます。途方に暮れた二人はやがてお菓子でできた家を見つけ、ガツガツとそれを食べ始めました。すると中から老

図3:『ヘンゼルとグレーテル』の「魔女」。
黒い頭布、尖った鼻をした典型的な姿をしています。

3 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 100ff.

婆が出てきて、可哀想な子供達を暖かく迎えてくれます。しかし翌朝になると老婆は豹変し、ヘンゼルは牢屋に閉じこめられ、グレーテルは家事をさせられます。

パン焼き窯で殺されそうになったグレーテルは機転を利かし、逆に老婆を焼き殺してしまいます。それから彼女はヘンゼルを助け出し、父のいる我が家へと急ぎます。途中大きな川がありましたが、グレーテルがカモの背中に乗せてくれるように頼み、その川を渡ることができました。二人が家につくと、継母は死んでしまっており、老婆の家から持ち帰った宝石のお陰で、家族は幸せに暮らしました。

③『白雪姫』(KHM53: Schneewittchen[4])

・登場人物…白雪姫の生みの母。継母。狩人。森に住む小人達。王子と

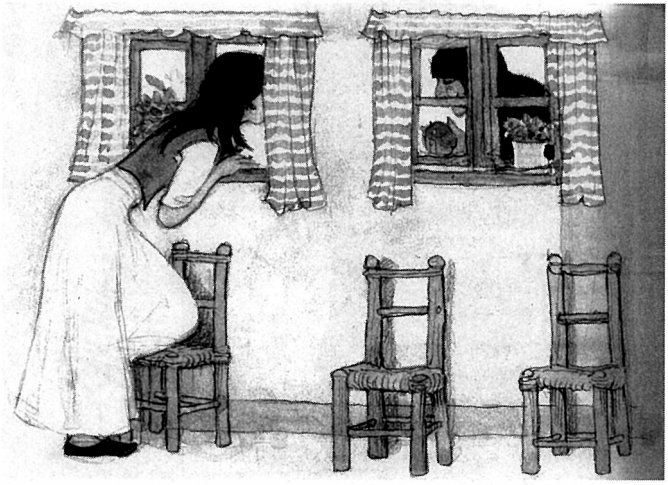

図4：『白雪姫』のワンシーン。
リンゴ売りに姿を変えた王妃様の姿は、黒い頭布と、曲がった鼻をした「魔女」の姿として描かれています。

4 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 269ff.

その家来。
・あらすじ…実母の死後、白雪姫の育ての母となった女は、鏡に「誰がこの世で一番美しいか」と問いかけては、自分の美貌を確認していました。けれど成長した白雪姫が一番です、と告げられた彼女は姫の殺害を命じ、その肝を食べてしまいます。しかし本当は彼女が死んでいなかったと知ると、王妃は変装し、自ら継娘の殺害に出向きます。三度目にそれは成功し、彼女が安堵したのも束の間。美しい死に顔に魅了された王子が城に連れ帰り、白雪姫はそこで息を吹き返してしまいます。そんな事とはつゆ知らず、王子の結婚式に参列した継母は、そこにいる花嫁が白雪姫だと知り驚きます。継母は処刑され、王子と白雪姫は幸せに暮らしました。

2.「魔女」たちの描かれ方

メルヒェンは内容を理解するために、特別な能力や高い教養を必要としたりはしません。そしてどれも皆、善と悪の対立項がはっきりしていて、読み手・聞き手にとって理解しやすいのが特徴です。この善と悪という「二つの対立関係はなんらの妥協も、灰色も許さない。白か黒か、善か悪かの二者択一以外にはない」[5]のです。そしてその原理に基づいて、上記の三つの話はどれも「魔女」が「悪」、そして彼女と対立関係にある子供たちが「善」と分かりやすい図式になっています。その上「悪」を象徴する「魔女」たちは、徹底的に悪人として描かれています。

例えばグリム兄弟が懇意にしていた、ハッセンプフルーク家から収集した『兄と妹』の話では、二人の兄妹が、継母のあまりにも冷たい扱いに耐えきれず、家を逃げ出してしまいます。ところが母親はそんなことなど百も承知で――何といっても魔法使いなのですから――、二人の逃げ込んだ森にあるすべての泉に魔法をかけ、それを飲んだ兄を鹿に変えてしまいます。その上それだけでは飽き足らず、妹が王妃となり子供を産んだと知るや否や、彼女を殺害に出向いています。その性質は執拗で

5　関敬吾：『関敬吾作品集5　昔話の構造』、同朋舎、1981年、91ページ。

陰険、そして冷徹な「魔女」のイメージそのもので、火あぶりになって当然の人物です。

そして両親によって森に捨てられても、帰り道が分かるようにと小石をまいた賢い兄と、泣き虫の妹とが対照的な『ヘンゼルとグレーテル』は、「童話など殆ど覚えていない」という人でも、なんとなく記憶に残っているかもしれません。タイトルや、細かい筋を忘れてしまっていたとしても、「お菓子の家」といえば誰でも「ああ、あれか」と思い当たるに違いありません。

そしてこの『ヘンゼルとグレーテル』に登場する魔女ほど、今尚多くの人々がイメージする、典型的な「魔女」の容貌を示してくれる物語は他にはないでしょう。

彼女は一人暮らしの老婆で、ただれた赤い目と曲がった鼻をしています。痩せぎすの体で、杖に縋るようにして歩き、手足はぶるぶる震えています。そして黒い衣装。

このメルヒェンのおかげで私たちの多くが、「魔女」といえば黒いとんがり帽子に黒いマントを羽織り、水晶玉に未来や過去を映し出してはほくそえむ、歯抜けのお婆さん、というイメージを払拭できないままでいます。

さてこの『ヘンゼルとグレーテル』の「魔女」ですが、彼女は恐ろしいことに子供を食べるのです。それはまさしく中世の魔女裁判が、「魔女」に着せた罪状どおりでもあります。

このメルヒェンに登場するのは、外見だけでなくその行動もまた、典型的な「魔女」なのです。

最後に『白雪姫』の話もまた『ヘンゼルとグレーテル』同様、子供達にとって印象深く、人気のあるものでしょう。絵本で知らなくとも、ディズニーがアニメ化していますし、幼稚園や小学校の低学年の間では、必ずと言っていいほどどこかのクラスでこの『白雪姫』が学芸会の発表演目に選ばれ、主役の白雪姫の座を巡り、早くも女たちの闘いが繰り広げられています。

そしてまたこの『白雪姫』でも継母が「魔女的」存在として描かれています。彼女ははっきりと「魔女」とは書かれていません。しかしその処刑方法（本論では詳しくは述べません）が、明らかに「魔女」に対す

るものであったことと、鏡と話をしている[6]ことが、彼女が「魔女」であったことを暗示しています。

美しさが自慢の彼女は、「自分が一番美しい」という地位を守りたいがために白雪姫の殺害を命じます。更に彼女が生きていると知るとすぐさま毒を製造し、彼女を殺すために自ら森の中まで出向いています。

彼女がたかだか七つの少女でしかない白雪姫の命を執拗に狙う理由はただ一つ、「この世で一番美しい女でありたい」という、愚かな願いのためです。自分の欲望のためだけに、幼い子供を殺すことをためらいもしない、血も涙もない女性です。

これらのメルヒェンに登場する「魔女」たちは全員、後に命を落とすことになります。しかしそれに対しては全く同情の余地がありません。当然です。というのも揃いも揃ってみな、身勝手な動機による殺人犯なのですから。

では16.17世紀、ヨーロッパに吹き荒れた魔女狩りの嵐の中殺された「魔女」たちは、これらのメルヒェンに登場する「魔女」たち同様、私利私欲のためだけに殺人に手を染めた、残虐非道な人たちだったのでしょうか。

次章では歴史上の「魔女」について具体的に見てみることにしましょう。

3.「魔女」と「賢い女性」

陰険で薄気味悪く、薄暗い部屋でなにやら怪しげな薬を作り、怒らせると何をしでかすか分からない。わたしたちが会ったこともない「魔女」に対して抱くイメージは、そんなマイナス要素ばかりが目立ちます。そしてこれらのイメージは、多くは直接的でないにせよ、何らかの形でメ

6 この「鏡」についてはいろいろな解釈が可能です。しかしドイツの民間信仰によれば、鏡は魔法と関連づけられていました。鏡のような表面をした水やあらゆる種類の金属、そして目もまた鏡と同じように利用されると信じられてきました。ここから後に、私たちが抱いているような、水晶にあらゆるものを映し出す「魔女」というイメージが定着したのです。Vgl. Nachträge in Handwörterbuch des deutschen Aberglauben, Bd. 9. Walter de Gruyter. Berlin. New York, S. 548ff.

ルヒェンから植え付けられたものです。

そしてこのような、メルヒェンに登場する憎らしい悪者の魔女達のイメージは、魔女迫害が行われた中世後期時代の名残だとジークリート・フリューは、『魔女と賢女達のメルヒェン』[7]の後書きで、指摘しています。

暗澹たる魔女迫害の時代、「魔女」と呼ばれた女性たちには、実に様々な嫌疑がかけられました。その代表的な罪状として、

1．隣家の牛乳を盗んだ。あるいは魔術をかけてバターやチーズの製造の邪魔をした。
2．魔法を使って人間や家畜を病気にした、あるいは殺した。
3．雹や嵐を呼び、農作物に被害を与えた。
4．男性を不能に、女性を不妊にすることで生殖に支障を来すようにした。
5．子供を殺し食べた。あるいは殺した子供を使って飛び薬を作った。
6．夜中に箒や動物たち、あるいは飛び薬を塗って空中飛行をした。
7．悪魔と自由意志で契約を結び、サバトに参加した。

などがあげられますが[8]、殺人犯ばかりのメルヒェンの「魔女」たちと異なり、現実の「魔女」たちが犯したとされるものの大部分は、生活に密着したものであることに気づくのではないでしょうか。

実は、魔女狩りの犠牲者の殆どが女性である理由がここにあります[9]。

---

7 Vgl. Früh, Sigrid: Märchen von Hexen und weisen Frauen. Fischer Taschenbuch Verlag, 1986, S. 139.

8 Vgl. Tuczay, Christa: Magie und Magier im Mittelalter. Deutscher Taschenbuch Verlag, 2003, S. 278, 283, 284, 287.

9 例えばドイツ南東部では、魔女迫害の犠牲者の82％が、そしてスイスのバーゼルでは95％、チューリヒでは83％、アッペンツェルでは100％が女性であったという統計もあります。Vgl. Leveck, Brian P: The witch-hunt in early modern Europe. London and New York, 1987, S. 125. sowie Garrett, Clarke: Women and witches. In: Witchcraft, society, Carland paulisching, Inc, 1992, S. 70.

池上俊一の言葉を借りるなら、「後期中世から近世にかけて、それまでまわりの住民から頼りにされていた農村の呪術使いの女性」[10]が「魔女」とされたのであり、彼女たちの行った呪術が「魔女の行為」とすりかえられてしまったからです。

様々な前兆を読み解くとともに、人々にどう行動すべきか、その指針を与える。自然と調和し、植物を用いて人々や動物たちの病気や怪我を治し、時には不妊症も改善する。呪術を用いて豊穣儀式を執り行い、出産を助け、生まれた子供に祝福を与えるなど、ヨーロッパがキリスト教化される以前、ゲルマンの社会には欠かすことのできない女性がいました。それが「賢い女性」(weise Frau) と呼ばれていた人々です。

けれどもいつしか彼女たちはキリスト教にとって、又近代へと移り変わっていく時代の中で、高橋義人がいうように「駆逐すべき自然の擁護者、代弁者」[11]であり、「森の中に住み、都市文化に馴染めない人。森の中で薬草を摘む前近代的な薬剤師」[12]として、その地位を奪われ、害悪をもたらすマイナスの存在でしかない「魔女」に貶められていきました。

「賢い女」が「魔女」へと換わっていく様子は、「グリム童話」の中にも窺えます。例えばKHM12『ラプンツェル』(Rapunzel[13]) では、本来薬草に長け、産まれた子供を守り育てる存在としての「賢い女性」の姿が、隣家の妊婦が欲しがるラプンツェルを分け与える代わりに、生まれた子供を要求し、その子を塔に幽閉して育てる、卑劣で薄気味悪い「魔女」に変わっています。このメルヒェンを読んだ人で、この「魔女」に肩入れする者など殆どいないでしょう。夫に盗みまで働かせ、結果的に生まれた赤ん坊を取り上げられることになるラプンツェルが、実は悪阻を抑える薬草であり、それを庭に植えていた「魔女」こそ「賢い女性」であったなどゲルマン文化の背景を知る、よほど注意深い読者でなければまず気づきません。

---

10 池上俊一:『魔女と聖女』、講談社、1992年、248ページ。

11 高橋義人:『魔女とヨーロッパ』、岩波書店、1995年、5ページ。

12 高橋、1995年、5ページ。

13 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 87ff.

このようにしてキリスト教は、肯定的な意味で「賢い女性」たちが行ってきたものを全て否定的な意味合いに変え、恐ろしい「魔女」像を民衆の間に定着させていったのです。

彼女たちの治療行為は、人間や家畜に災いをもたらすためのものとされ、祈りや祝福の言葉は呪いの言葉ととられました。KHM50『いばら姫』(Dornröschen[14]) では王女の誕生の祝宴に招かれた12人の仙女たちが、一人ずつ王女に祝福の言葉を与えています。ところが招待されなかったことに腹を立てた13人目の仙女は、王女に祝福ではなく、呪いの言葉を吐いています。先の12人が本来の「賢い女性」の姿で、後者はキリスト教が作り上げた「魔女」化された賢い女性を描写しているのですが、このことも先ほどの『ラプンツェル』同様、その関連性に気づく人は殆どいないでしょう。

けれども実際魔女狩りで犠牲となった多くの女性たちは、『ラプンツェル』や『いばら姫』に登場するような賢女ではありませんでした。犠牲者の殆どは、どこの村社会にでもいる、老婆、夫という後ろ盾をなくした寡婦、あるいは未婚者でした。なぜなら「村人や町人たちは未亡人や年かさの未婚女性を、彼女たちが結婚していない、というよりむしろ年老いており、また貧しいということから魔女だと疑っていた」[15]からです。

その他にはよそ者、加えて何らかの理由で近隣の女性（たち）の嫉妬を買った女性や嫌われ者なども犠牲者となりました。つまり魔女狩りの時代にその土地に住んでいた女性なら、誰もが「魔女」になる可能性を持っていたのです。そしてこのことが数万人もの犠牲者を作り出す要因となったのです。

4．「魔女」化される女性たち

『ラプンツェル』や『いばら姫』からも窺えるように、かつて特別な力を持っていた女性たちが、キリスト教によって「魔女」化されたことは事実です。父なる神を頂点に、男性中心のヒエラルヒーを作り上げる

14 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 257ff.

15 Leveck, 1987, S. 132.

キリスト教にとって、女性が活躍し、人々から尊敬される社会は目障りなものでした。けれども決してキリスト教だけが「魔女」を独自に作り上げたわけではありません。

「魔女」が作り上げられていく過程の背後では、「基層文化」「キリスト教」そして近代化への途上にあった「社会」の三つが複雑に絡んでいたのです。

当時の基層文化は常に「生」と「死」を意識した、農作物の豊穣を願う信仰を持っていました。

大地に生まれた小さな芽は、やがて大きな実りを人々に与えてくれます。穏やかな気候と色とりどりの景色が織り成すものは、まさしく「生」の明るい世界です。けれども収穫を終えた後にあるのは暗い「死」の世界で、季節は生きるものにとって決して優しくない冬です。冷たい風や雪、枯れた木々と、植物の芽吹いていない鈍色の世界は、ただただ「死」の世界でした。

とはいえ当時の人々にとって「死」は、決して恐ろしいだけのものではありませんでした。なぜなら「死」は「生」との一本の線上にあるものと考えられていました。「生」の先には「死」が、「死」の先には「生」がある。生命力あふれる「生」の季節は、しかし同時に「死」の世界へ近づきつつあることを意味しています。

一見すべてが息絶えた冬の「死」の下では、次の春に向かっての「生」が進行しています。そうして「生」と「死」は常に繰り返されていくのです。この「生」と「死」のサイクルを、リルケは緩やかな弧を描くお腹を抱えた妊婦と、その中の胎児の姿に、非常にうまく映しています[16]。

そしてこの世界観は自然に対してだけでなく、人間の世界にもまた適用されていました。人間も自然の一員です。人は生まれると同時に死に向かって生きているのです。そして「死」は次の「生」のためには誰もが通過しなくてはならないものなのです。生を持つことは、死を持つことでもありました。

人々は生きていくために生命力あふれる豊穣を願い、自然を崇拝し、

16 Vgl. Rilke, Rainer Maria: Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge. In: Rainer Maria Rilke Sämtliche Werke, Bd. 7, Insel Verlag 1987, S. 721ff.

神に祈りをささげました。大地、天空、気候、巡る季節といった自然のみならず、商売や恋愛、そして黄泉の国と、ゲルマンの人々は自分たちを取り巻く全ての事象に、かつての日本と同じように神々が存在するとみなしていたのです。

ところがそこへキリスト教がやってきます。宣教師たちがこの地でキリスト教を広めていくためには、どうしてもこの既存の信仰を駆逐する必要がありました。といっても「今日から全員キリスト教徒になりなさい」といって、簡単に人々が改宗してくれるはずはありません。

そこでキリスト教は、ゲルマンの神々を言葉巧みに邪悪なものとし、神々に関連したものや儀式などを、キリスト教に因んだものにうまく流用したのです。ハイネの言葉を借りるなら「教会の教えは古代の神々を[…]、キリスト教の勝利によってその権力の絶頂からつきおとし、今や地上の古い神殿の廃墟や、魔法の森の暗闇の世界で暮らす悪霊たちである」[17]と人々に思わせたのです[18]。

そうして片端からキリスト教という覆いの下に隠されていったゲルマンの神々には、男性だけでなく、女性もいました。一神教のキリスト教にとって、神が複数いるということさえ許せなかったのに、まして罪の象徴である女性が神であるなどもってのほかです。キリスト教は徹底的に女神たちを悪魔化し、彼女たちの持っていたアンビバレントな力の片側だけを強調し、人々の生活を脅かす根源に仕立て上げたのです。

ところでもうお気づきかと思いますが、ゲルマンの神々とキリスト教の神とでは、性質が全く異なります。ゲルマンの神々（日本神話に登場する神々もそうですが）は、非常に人間的な存在でした。彼らはひたすら「赦し」を与える寛大な御心のみを持つキリスト教の神と異なり、喜

17 Heine, Heinrich: Götter im Exil. In: Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke. Hoffmann und Campe, 1987. S. 125.

18 ちなみに既存のものを新しく入ってきたものがうまく流用するというやり方は、キリスト教の専売特許ではありません。日本に仏教が入ってきたときも、仏教は日本にそれまであった祖先崇拝や祖霊信仰とうまく融合した結果、形は本来のものとは少々異なったものになってしまいましたが、日本に根付くことができたのです。

怒哀楽の感情を持っていました。心優しい者、勤勉な者には味方する一方で、そうでない者には容赦なく罰を与えました。

例えばKHM24『ホレおばさん』(Frau Holle[19])に登場するホレおばさんは、元々は天空を統治する主神ヴォーダンとペアになるホルダ(Holda)、あるいはペルヒト(Percht)やベルヒト(Bercht)と呼ばれる豊穣の大地母神でした。彼女は生命を育む神であると同時に、死者の霊全体を表象する女神でもありました。

彼女は12夜に徘徊し、糸紡ぎをする女性や子供を見て回り、褒美を与えたり罰したりもします。糸紡ぎをする女性に賞罰を与えることをテーマにしたのが、この『ホレおばさん』のメルヒェンです。ホレおばさんは勤勉な娘には帰り際に黄金を与えていますが、怠惰な娘には黄金の代わりに、洗っても落ちないピッチを与えています。

そんな彼女もまたキリスト教徒によって「魔女」とされた神々の一人ですが、そのことはここでは割愛します。

このようにゲルマンの女神たちが「魔女」へと落ちていく一方で、家庭の切り盛りや、家族の世話、病人の看病などを役割分担していた、そしてまたその生理的性質上、より自然に近い性とみなされていた全ての女性もまた、後に「魔女」とされる理由をこじつけられました。

女性たちは毎日牛や鶏の世話をし、料理をします。バターやチーズは食事に欠かせないだけでなく、それを売ることで彼女たちの収入にもなりました。けれどもいつも良質のバターやチーズができるとは限りません。食品は鮮度や外的温度などの諸条件で、微妙な変化を起こします。真空保存や冷蔵庫などあるはずもない当時、食品をいつでも一定の条件下におくことなどとても不可能です。現代なら、たとえバターがうまくできなかったとしても、その理由を科学的根拠でもって説明することができます。しかし中世ヨーロッパでは、その理由は化学変化ではなく、「魔女」の仕業と考えられたのです。

また女性たちは母から娘へ、祖母から孫娘へと薬草の調合を伝え習っていました。女性たちはその知識を病気や怪我だけでなく、より美味しい乳製品や自家製ビールを作る際にも利用していました。

---

19 Vgl. Brüder Grimm, 1999, S. 150ff.

けれどどんな知識も諸刃の剣です。彼女たちのもつ知識は、治療や調理に有効利用される一方で、人や動物に害悪をもたらす可能性もありました。

例えば黒イチゴの根は腎臓や膀胱の障害に[20]、コケモモは下痢止めや赤痢に効くとされました[21]。そしてニンニクは子供の虫下しや、大人の胃カタル、あるいは蛇などにかまれた傷口にも使用されました[22]。その一方でベラドンナは呼吸困難などの改善に有効利用されましたが、大量に摂ると最悪の場合は死を引き起こしました[23]から、それを用いて誰かに害を与えることも、家畜を殺すこともできました。家畜は「財産」でしたから、それになんらかの不都合が生じると、一家にとって大きな痛手でした。

つまり女性は家族や家畜の世話だけでなく、財産や生命にも深く関わっていたのです。そしてこの「生命」という、何よりも大切なものを一手に任された女性たちの営みの中、物事や人間関係がうまくいっているときは何の不都合もありません。けれどひとたび共同体に何らかの問題が生じたなら、それは全て女性たちのせいであり、女性たちの内の誰かが「魔女」であるせいでした。

といってもそれだけでは拷問を受け、でっち上げの告白によって、数万人もの女性が処刑されることにはなりませんでした。なぜなら共同体の中にいるとされた「魔女」は、私たちが抱いているような「魔女」のイメージとは異なる存在でした。

ところが15世紀後半、魔女迫害に決定的となる「魔女」のイメージを「もっぱら悪魔学者などキリスト教のエリートが考案」[24]しました。特にハインリッヒ・インスティトリス（Heinrich Institoris）の『魔女への鉄槌』（Malleus Maleficarum）は、その後の魔女裁判に決定的な役割を果

20 Vgl. Most, Georg Friedrich: Encyklopädie der Volksmedicin. Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Granz, 1984, S. 8ff.

21 Vgl. Most 1984, S. 271ff.

22 Vgl. Most 1994, S. 318ff.

23 Vgl. Most 1984, S. 51ff.

24 池上、1992年、248ページ。

たしました。なぜならこの「『魔女への鉄槌』や他の根拠によって、1500年頃からあらゆる年齢の人々 —— 特に女性 —— が、〔魔女ではないかと〕疑われ、迫害された」[25]からです。

一部の人々によってイメージづけられた「魔女」は、悪魔と自らの意思で契約し、悪魔に仕え、神を冒涜し、神の子であるキリスト教徒を惑わし、道を踏み外させようとする敵、異端者でした。そして「魔女」は悪魔の力を借り、ありとあらゆる方法で社会に混乱と不安をもたらすとされました。

その結果「魔女」と告発され、捕らえられた女性たちは、あらん限りの拷問の末、「魔女」としての雛型通りの告白を無理強いされ、炎の中に崩れ落ちていったのです。

この「魔女」迫害は時折、一部のフェミニストたちによって「男性による女性迫害の最たるもの」と批判されます。確かにサバトに出かけたり、人に魔術をかけては不幸にしたり、子供をさらうといった今尚残る「魔女」のイメージは、一部の男性たちが作り上げたものです。おまけに彼らは女性が知的に劣っていて、また大きなヒップや華奢な肩、「ちっぽけな脳みそ」のせいで十分なエネルギーがないのだ[26]とし、その上女性は男性よりも知肉体的にも精神的にも遙かに劣っているが故、悪魔につけ込まれやすい、とされたのです。このような愚かな考えが、教養のある人々によってまことしやかに主張されたのです。

けれども女性たちが、あれほどの数の同性が迫害されていくことに全く責任がないわけではありませんでした。というのも女性は共同体の秩序を保つため以外にも、同性の誰かを「魔女」と告発し、あるいは魔女裁判の際に証言台に立つことで、「魔女」の迫害に追い討ちをかけたからです。そこには女性同士の複雑な感情の絡み合いが存在し、様々な思い

25 Baver, Edward: Old age and witchcraft in early Europe. In: Witchcraft, women and society. Carland Publisching, Inc. 1992, S. 239.

26 Vgl. Coudert, P. Allison: The myth of the improved status of protestant women: The case of witchcraze. In: Witchcraft, women and society, Carland Publishing, Inc, 1992, S. 70.

が「魔女」をでっちあげ、逆に「魔女」と訴えられたのです。

例えば先に乳製品やビールを製造することは当時の女性の仕事であった、と述べましたが、上手にこれらを作ることができる者もまた、「魔女」とされる場合もありました。彼女は悪魔の力を借りて、上手にそれらを製造したのだと噂されました。また飼っている牛がたくさん乳を出すことも、「魔女」とされる理由でした。これは「牛乳魔女」[27]と呼ばれるもので、ここには「富の量は一定」という考えがありました。簡単に言えば、10軒からなる共同体全体にいる牛たちが出すミルクの総量が1000ℓと考えられていたとします。10軒で1000ℓですから、1軒あたり100ℓ牛乳が出るとされます。ところがある家の牛が500ℓ出してしまったとします。すると残りの9軒は大変困るわけです。なぜなら総量は一定と考えるのですから、後500ℓを9軒の家の牛で分けるわけです。100ℓ出すと思われていたのが、1軒あたりおよそ56ℓしか出さない計算になるのです。これは残された9軒の家にとっては死活問題でした。家政を預かる女性たちにとって「魔女」を排斥することは、当然のことだったのです。

5．もう一つの「魔女」狩り

以上「魔女」について簡単に述べてきました。「魔女」が元々は女神であり、恐ろしい「魔女」の姿は彼女たちのほんの一面が強調されたに過ぎず、しかもその「魔女」像は教会関係者や学者が作り上げたものでしかありませんでした。

あるいは「魔女」は決して特別な者だけでなく、家政を預かるすべての女性が、その嫌疑をかけられるおそれがあったという歴史的事実を踏

27 この「牛乳魔女」についてのメルヒェンが、グリム兄弟が集めたものの中にもあります。『牛乳の鈴』(Das Milchglöcklein) というタイトルで、残念ながら『グリム童話』に採用され、広く世に出ることはありませんでしたが、何かモノ（このメルヒェンでは鈴）を使って近隣の牛乳を盗むことができる、という当時の迷信通りのメルヒェンです。
グリム（フローチャー美和子訳）：『封印されたグリム童話』、平文社、2004年、106～107ページ参照。

まえた上で、再度『兄と妹』『ヘンゼルとグレーテル』そして『白雪姫』を見つめなおせば、これらのメルヒェンに登場する「魔女」たちは、本当に処刑されるに値する人物だったのか、という疑問がわいてきます。

確かに彼女たちは子供たちをひどい目に遭わせています。けれどマリア・タタールに言わせれば「とどのつまり、おとぎ話はどうにも変わりようがなく『主人公中心主義』」[28]であり、そしてこれらのメルヒェンはすべて、「か弱い」子供たちの視点側にたって描かれたものなのです。つまり子供たちが主人公で、メルヒェンの語り手、聞き手そして読み手の全員が、知らず知らずのうちに主人公の子供たちに肩入れしてしまうのです。

けれどももし、加害者とされる「魔女」の視点からこれらのメルヒェンを語り直したなら、また違った面が見えてくるのではないでしょうか。

たとえば『兄と妹』で王妃の地位についた継娘を殺した「魔女」も、実は自分の娘をその地位につけてあげたいという母の、行き過ぎた愛情ではなかったのではないでしょうか。『ヘンゼルとグレーテル』で焼き殺された「魔女」は、実際は一人暮らしの変わり者の老婆でしかなかったのではないでしょうか[29]。あるいは森に捨てられた兄妹には「森のなかには恐ろしい魔女が住んでいるという村人の共同幻想をこの老婆に投影」[30]し、自分たちを食べようとしているという恐怖に駆られ、親切なただの老婆を単なる思いこみから殺してしまったのではないでしょうか。

同様に『白雪姫』に登場する王妃は、その美しさゆえ、周囲の女性たちの妬みをかい、「魔女」とされたのではないでしょうか。いつの世も女性の女性に対する厳しい目と、嫉妬は変わらないのです。

ところでここでこの三つのメルヒェンに共通する、あることに気づきます。それはこれらに登場する「魔女」とは呼ばれていない少女たちの振る舞いです。

28　マリア・タタール（鈴木晶他訳）：『グリム童話 ── その隠されたメッセージ』、新曜社、1990年、264ページ。

29　実際初期の「魔女」迫害で処刑されたのは、その殆どが一人暮らしの老婆でした。

30　高橋、1995年、34ページ。

1．逃避行を続ける妹が、三度も非人間的なもの、すなわち飲むと動物に変身してしまうという「泉の声」を聞いている。そしてまた狩猟にやってきた王と狩人たちに追われ、傷を負ったシカになった兄に、薬草をはってやる。(『兄と妹』)
2．森の中で「魔女」と敵対するや否や、今までのグレーテルの頼りなさはすっかりなくなり、果敢に「魔女」と対峙している。そして「魔女」を倒した後、橋のない川を渡してくれるように彼女は、白いカモに頼んでいる[31]。(『ヘンゼルとグレーテル』)
3．どうせ森に逃げたところで「野生の動物たちに食い殺されてしまう」[32]はずの白雪姫だが、動物たちに襲われることもないどころか、彼らはみな彼女の横を素通りしている。(『白雪姫』)

自然の声を聞き、動物たちと話をし[33]、薬を調合する少女たちの働きぶりは、「魔女」の悪事の影に隠れてつい見過ごされがちですが、ここからも自然と結びついた存在であった女性たちの片鱗がうかがえるでしょう。

「魔女」と名指しされていない少女たちは全員被害者です。虐待や保護責任遺棄、残虐非道な「魔女」によって殺害、あるいは殺されかけた

31 この「白いカモ」はグリム童話の初版では登場しません。後にグリム兄弟が付け加えたものですが、それは「鳥」に対して人々が持っていたイメージを考慮してのことでした。しかし又、動物と話をするのが少女のグレーテルの方であることから、かつての女性の役割も又考慮してのことではないかと私は思います。Vgl. Herausgegeben und erläutert von Heinz Rölleke: Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Fondation Martin Bodmer Cologny-Geneve, 1975, S. 71ff.

32 Brüder Grimm, 1999, S. 270.

33 継母である王妃がこの世で一番美しいのは誰かと問うているのは「鏡」という無機物である話が一般的ですが、類話にはSpeigelは犬の名前で、「誰が一番の美人か」とその犬に尋ねているものがあります。するとこの王妃からも又、かつての女性たちと同じように「自然と調和」していた姿が浮かび上がってきます。Vgl. Brüder Grimm: Anmerkung der Brüder Grimm. In: Herausgegeben von Heinz Rölleke: Kinder- und Hausmärchen Gesammelt durch die Brüder Grimm, der dritten Auflage. Deutscher Klassiker Verlag, 1999, S. 948ff.

哀れな子供たちです。奇蹟的に命を取り戻した後、加害者である「魔女」の火刑に、間接的に加担したことや（『兄と妹』『白雪姫』）、悪い「魔女」をパン焼き窯で焼き殺したことや、「魔女」が持っていた財産を持ち逃げした（『ヘンゼルとグレーテル』）ことなど、「魔女」の仕打ちに比べれば責められるほどのことではありません。

メルヒェンの際立った「善」と「悪」との前では、あくまでも片方の犯した罪の大きさが問題なのであり、それに見合うだけの幸福がもう片方に訪れなくてはならないのですから、被害者の少々の罪など取るに足りないことですし、また取り上げるべきではないのです。

ところで興味深いことに、これらのメルヒェンの主役は全て女性（少女）たちです。なるほど確かに『白雪姫』以外の二作品には男の子も登場しています。特に『ヘンゼルとグレーテル』では、男の子は知恵を働かし、泣き虫の妹を励ましています。けれどもそれも「魔女」につかまるまでの話です。「魔女」の食料となるため閉じ込められた少年にできたことは、知恵を絞って自分の身を守ることだけです。グレーテルの活躍がなければ、彼は予定通りに「魔女」の食卓に上っていたでしょう。ですから彼は「真の」主人公とはいえません。

ということは、つまりこれらは全て「女と女の闘い」なのです。そう考えると『兄と妹』や『白雪姫』の「魔女」が、あれほど執拗に少女たちの生命をねらったことに説明がつきますし、『ヘンゼルとグレーテル』ではなぜ杖なしでは歩くことができないほどの老婆が、家事労働に使えるグレーテルを殺そうとするのかということにも納得がいきます。つまり「魔女」の真の目的は、同性である「グレーテルの抹殺」だったのです。

その上森を抜け出した二人が家に帰ると都合のいいことに、自分たちを森に棄ててくるように夫を唆した継母（当然女性）も死んでいます。この母親と森に住む「魔女」が同一人物であることは明らかです。ここでも又「女の敵は女」という、あの普遍の図式が浮かび上がってきます。

現実の「魔女」迫害の犠牲者が多いのには、女性自身が加担していたのは紛れもない事実です。そこに存在していたのは女同士の葛藤、つまり女性たちの争いです。とすると、これら三つのメルヒェンは、少女たちが「魔女」たちを告発し、彼女たちを間接的に、あるいは直接的に火

刑台にへと導く過程を描いたものとも解釈できるのではないでしょうか。

そしてもし、「魔女」狩りがもっと長く続いたなら、あるいは『グリム童話』に続編があったなら、これらのメルヒェンで勝利する少女たちも、哀れな女性たち同様、いつか「魔女」の烙印を押され、火刑台へと上らなくてはならなかったに違いありません。

【図版出典】

図1・Baeten, Lieve: Die kleine Hexe hat Geburtztag, Friedrich Oetinger Verlag, Hamburg, 1995, S. 16.

図2.『永遠のグリム童話　カッセル・グリム兄弟博物館所蔵』、ブックグローブ社、2003年、22ページ。

図3・Brüder Grimm/Illustriet von Svend, otto S: Die schönste Märchen der Gebrüder Grimm. Lappan Verlag GmbH, 2000, S. 196.

図4・Brüder Grimm/Svend, 2000, S. 250.

【参考文献】

Linder, Theodor: Gesichte des Deutschen Volks. Stuttgart, 1894.

Löblich, Eberhand: Hexenleben Weise Frauen und Zauberschen, mdv Mitteldeutscher Verlag GmbH, Halle (Saale), 2001.

Schormann, Gerhard: Hexenprozesse in Deutschland. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1996.

Jerouschek, Günter: Die Hexen und iher Prozeß. Stadtarchiv Esslingen am Necker, 1992.

Röhner, Regina: Hexen müssen brennen. Chemnitzer Verlag, 2000.

Scherf, Walter: Das Märchenlexikon. C. H. Beck Verlag, München, 1995.

Lüthi, Max: Märchen. J. B. Metzler Verlag, Stuttgart, Weimar, 1996.

Graubard, Mark: Witchcraft and the nature of man. University Press of America, 1894.

J. B. ラッセル（野村美紀子訳）：『魔術の歴史』、筑摩書房、1987年。

G. ジェニングス（市場泰男訳）：『エピソード魔法の歴史』、社会思想社、1979年。

ミルチア・エリアーデ（楠正弘/池上良正訳）：『オカルティズム』、未来社、1978年。

キース・トマス（荒木正紀訳）：『宗教と魔術の衰退』、法政大学出版局、1993年。

ノーマン・コーン（山本通訳）：『魔女狩りの社会史』、岩波書店、1983年。

バーバラ・エーレンライク/ディアドリー・イングリッシュ（長瀬久子訳）：『魔女・産婆・看護婦』、法政大学出版、1996年。
カルロ・ギンズブルグ（竹山博英訳）：『ベナンダンティ』、せりか書房、1986年。
D. P. マニックス（吉田誠一訳）：『人間はどこまで残虐になれるか』、講談社、1999年。
E. アードナー/S. B. オートナー他（山崎カヲル訳）：『男が文化で、女は自然か？』、晶文社、1987年。
上山安敏：『魔女とキリスト教』、講談社、1987年。
牟田和夫：『魔女裁判』、吉川弘文館、2000年。
安田喜憲編：『魔女の文明史』、八坂書房、2004年。
阿部謹也：『ヨーロッパ中世の世界観』、講談社、1991年。
植田重雄：『ヨーロッパの神と祭 —— 光と闇の習俗』、早稲田大学出版部、1995年。
武田昭：『教会歴による —— ドイツ民謡』、東洋出版、1980年。
浜本隆志/柏木治編：『ヨーロッパの祭りたち』、明石書店、2003年。
グリム（フローチャー美和子訳）：『初版以前　グリムメルヘン集』、東洋書林、2001年。
石塚正英：『白雪姫とフェティシュ信仰』、理想社、1995年。
清水正：『謎とき『ヘンゼルとグレーテル』 —— グリム童話の深層と再構築』、星雲社、1995年。
根岸謙之助：『医の民俗』、雄山閣出版、1988年。
山崎幹夫：『毒の話』、中央公論社、1985年。